

景德鎮の陶磁器クラスターにおけるイノベーション過程に関する考察

大 木 裕 子

はじめに

景德鎮は、1982年に北京や西安など24都市と共に「国家歴史文化名城」¹⁾に指定され、中国の文化遺産保護対象都市となった。この時指定を受けた都市の大半は商業都市として発達してきたが、景德鎮はこれの中で唯一手工業を礎とした産業都市で、その景德鎮を経済的、文化的に支えてきたのが窯業である。磁器の原料となる高嶺土²⁾(カオリン)と薪(松材)に恵まれていた昌南³⁾(現在の景德鎮)では、既に漢の時代から磁器生産が開始されており、街を貫き北から南に流れる昌江から原料や製品が国内外に運搬されていったことから、昌南の名は広まり、その後景德鎮と改名された。景德鎮には、窯業に携わる職人、商人、労働者も集まるようになり、産業都市として発展した。

宋代から明・清時代を通して最盛期にあった陶磁器生産では、官窯で生産された青花に加え、官窯から生産を委嘱された民窯の技術も発達し、様々な新たな絵付技法が生まれて国内外の需要を開拓し、隆盛を極めた。景德鎮の陶磁器は「玉のような白さ、鏡のような明るさ、紙のような薄さ、馨のような音色」と評され、伝統的な名磁としては青花瓷器⁴⁾、玲瓏瓷⁵⁾、粉彩⁶⁾、顔色釉⁷⁾が知られている。

もっとも、これまで陶磁器生産が脈々と続いてはきたものの、中華人民共和国となってからの国营工場の量産体制や、新たな社会主義文化を創生しようとする文化大革命を通して、現在の景德鎮の陶磁器産業は過去の隆盛期とはおよそ異なる様相を呈している。これまでに景德鎮の陶磁器産業については、朱琰(1767)『陶説』、藍浦(1795)『景德鎮陶録』以来、中国を中心に歴史的研究が蓄積されてきた⁸⁾。日本でも多様な視点からの研究がされている(佐久間1999, 喻2003, 彭2007, 李2010他)が、景德鎮が歴史的に栄華を極めた時代に関する研究が多く、景德鎮の現在に関する調査

1) 歴史的価値が高く現在も継続されている都市を保護する制度で、現在102の都市が指定を受けている。

2) 17世紀に景德鎮に來たフランスの宣教師がフランスに持ち帰り、後にフランス陶磁器会社が高嶺土をカオリンと命名し、世界中に広まっていった。

3) 昌南“Changnan”は中国の陶磁器製品を表すようになり、国の呼称“China”の語源ともなった。

4) 特殊な鉱石を絵付けの顔料とする下絵付け磁器の一種で、青色の文様が古典的な趣を顯す。

5) 宋代の透かし彫り技術をもとに発展させたもので、磁器の中に透明な小さな孔が多数あり、光に透かして見ると一層美しい。

6) 清代に発達した低温彩磁工芸の一種で、明末の五彩の技法を基礎に、琺瑯彩の制作技術を取り入れて創り出した。

7) 高温顔色釉で、釉薬が変かして生じた珍しい窯変を指す。

8) 詳しくは金沢(2002)p.92を参照されたい。

としては、方（2004）のクラスターの分業と出身地に関する研究が、旧民窯から新民窯への移行がもたらした集団から個人への生産主体の変化を捉えていて興味深い⁹⁾。本稿では、景德鎮の陶磁産業クラスター全体を捉え、製品を高度化するための方向性を示すために、景德鎮の陶磁業に関する先行研究を踏まえながら、現地でのヒアリング調査をもとに景德鎮の現状について分析し、イノベーション創出への課題を探究する。

1. 中国陶磁の歴史

1) 背景

まず宋代までの中国の陶磁器の歴史を概観しておきたい。

①新石器時代

中国では約7千から1万年前の新石器時代の土器が出土されている。その後、黄河中上流域、黄河下流域、長江以南の江南地域では、独自の土器、陶器が作られるようになった。黄河中上流域では灰陶から彩陶文化、黄河下流域では紅陶から彩陶、灰陶・黒陶・白陶を経て黒陶が主流に、江南地域では紅陶・灰陶から黒陶、紅陶を経て再び黒陶へと引き継がれていった。

②夏・商・周・秦・漢時代

商の時代（B.C.1600年頃～）には施釉陶の焼成技術が生まれ、原始瓷器と呼ばれる灰釉陶が誕生し、秦代（B.C.259年－B.C.210年）、漢代（前漢 B.C.206年－8年、後漢 25年－220年）になると、灰陶、加彩灰陶が大量に生産されるようになった。低火度で焼成する鉛釉陶も開発され、後漢時代には越窯青磁と呼ばれる本格的な青磁が誕生した。後に一大産地となる景德鎮でも、漢時代に陶磁器の生産が始められている。

③三国・兩晋・南北朝時代

三国時代から西晋時代（220年－317年）に発達した越窯青磁には、人物や動物を形どった独特の造形的な特徴もみられる。また華北地域では、北齊時代（550年－577年）に高火度焼成による白磁が開発された。

④唐時代

唐時代（618年－906年）には、浙江省北部越州窯から浙江省南部、福建省、江西省にまで産地が拡大し、陶磁器生産が隆盛した。華北では耀州窯の黒磁・白釉磁、^{けいしゅうよう}邢州窯などの白磁生産が広がり、唐時代の終わりには定窯（河北省曲陽県）が白磁生産の中心となっていった。白釉陶は、鶴壁窯（河南省）、密県窯（河南省）、登封窯（河南省）、河南省、河北省、山東省、安徽省、山西省、陝西省へ

9) 本稿5節で詳述する。

と広がりを見せ、白釉緑彩や釉下鉄絵も開発された。また、邪州窯、耀州窯、鞏県窯などでは、墓に副葬される明器¹⁰⁾として唐三彩の生産が盛んであった。当時の著名な窯としては、「越州窯（浙江省慈溪）、鼎州窯（陝西省耀州窯）、づ州窯（浙江省金華）、岳州窯（湖南省湘陰）、壽州窯（安徽省淮南）、洪州窯（江西省豊城）、邢州窯の碗（白磁）」¹¹⁾が挙げられる。

⑤宋時代（960—1279年）

白磁では定窯が代表的で、主に刻花や印花で文様を施した象牙色の白磁を生産した。12世紀頃からは「伏せ焼き」¹²⁾の焼成手法が採用されたことで、生産性も高まった。青白磁は江西省の吉州窯や南豊窯、福建省の徳化窯、建窯、浦城窯の他、広東省、安徽省、浙江省などでも焼成されるようになった。耀州窯では、磁州窯系の窯として白釉陶や唐三彩に加え、越州窯の秘色青磁の影響を受けた優れた青磁も大量に生産した。燃料が薪から石炭へ移ったことで、強い火力が持続するようになり磁器生産の追い風となった。河南省の臨汝窯、宝豊窯などでも耀州窯の作風を持つ青磁が生産され、汝窯へと受け継がれた。1127年に宋王室は都を臨安（杭州）に移し、南宋官窯が開設された。越州窯系を引く龍泉窯は、南宋時代に飛躍的に発展して当時数百の窯が点在していた。華北の民窯を代表する河北省南部を中心とする磁州窯では、白化粧の上に自由な模様を施した製品¹³⁾が作られ、磁州窯系の窯が河南省をはじめ、河北省、山西省、山東省、陝西省に広がっていた。こうして華北では磁州窯系、耀州窯系、鈞窯系、定窯系が重なり合う形で需要に応えるようになった。

宋代の五大名窯としては、官窯、哥窯、汝窯、定窯、鈞窯が知られている。

2) 景德鎮の陶磁産業の歴史 宋代～清代まで

このように中国では窯業技術がめざましく発達する中で、漢時代に陶磁器生産が始まったとされる景德鎮は、以下にみるように、北宋時代に青白磁の完成により中国を代表する陶磁器産地となった。次に、景德鎮における陶磁器生産の推移について宋から現代に至る推移を示していく。

①宋時代

北方の戦乱を避け多くの陶工が集まってきた江西省の昌南鎮では、越州窯系の青磁とともに白磁が生産されるようになり、11世紀頃からは青白磁が量産されていった。北宋の景德年間（1004—1007年）には、真宗皇帝により「昌南鎮」が「景德鎮」と改称された。景德鎮窯は宮廷御用達とされ、宮廷用陶磁器の生産を監督する「監鎮官」が宮廷から派遣されて、製品の底には「景德年製」の款

10) （めいき）、死者に添えて墓に納める装具の一種で、専用の器物。

11) 大阪市立東洋陶磁美術館 HP 出川哲郎「陶磁の歴史：中国陶磁の視点」、陸羽の『茶経』（761年頃）

12) 焼成で形が崩れるのを防ぐことができる。

13) 陶磁学院二十歩文雄客員教授によれば、「その逆の黒化粧の上に模様を施した製品もある。①白地黒花文、②黒地白花文ともいう。」

が書かれた。蔣祈の『陶記』¹⁴⁾によれば、「景德鎮には300の窯」が存在しており、影青と呼ばれる優れた青白磁を焼成したことから「景德鎮の磁器」として知られるようになった。

宋代は景德鎮における陶磁器生産が目覚ましい発展をとげた時期であり、歴史を持ち、芸術性に優れた青白磁により、景德鎮は磁器産地として歴史に名を刻むことになった。この青白磁の技法の開発は、後世にも大きな影響を与えることになった。もっとも、この時代に貢がれた御器の大半は、監鎮官が直接磁器生産に関与するというよりは、競争的關係にある民窯の中から選りすぐられたものであった。

②元時代（1271—1368年）

元代になると宮廷への献上制度が更に進み、景德鎮には1278年に浮梁瓷局¹⁵⁾と呼ばれる政府の管理機関が設立された。浮梁瓷局は民窯への振り分けや品質管理、磁器輸送のために設置された機関であったが、宋から元時代にかけての宮廷への献上は小規模におこなわれていた。

景德鎮の陶磁器は刻花や印花による文様表現が主流であったが、文様のデザインは様々に工夫され、特に14世紀前半に景德鎮で誕生した青花染付が定着すると、緻密な模様構成や多彩な表現が可能となり、写実的な文様も出現した。龍文、鳳凰文などの動植物の文様が好まれて描かれた。青花磁器は、白磁の釉下にコバルトで絵付けをし、透明な釉薬をかけて1,300度前後の高温で焼成した彩画磁器である¹⁶⁾。景德鎮の染付は1330年前後に開始されたと考えられているが¹⁷⁾、青花磁器の焼成技術は急速に発達したことから、大型の盤や壺が製作されるようになり、広い面積に描かれる文様が磁器生産の中心的な課題となっていた。

この時期に、中国の磁器は単色から彩色の時代へと移行していった。コバルトを全面にかけた瑠璃釉磁、銅紅釉を全面にかけた紅釉磁も、この時期に開発されたものである。景德鎮の青花磁器は対外輸出を前提として発達したもので、元代の青花磁器の大作はイスラム圏にも輸出された。海外需要¹⁸⁾の増大によって、それからわずか70～80年の間に景德鎮の名は海外で染付の産地としての名声を博し、その後国内市場にも広まっていった。景德鎮の青白磁生産は、市街地と郊外の湖田窯に広がる広大な地域でおこなわれるようになった。

③明時代（1368年—1644年）

明代初期には、永楽帝の対外貿易政策と南洋航海に促された中国と西アジアの大規模な貿易拡張

14) 南宋時代に書かれた蔣祈『陶記』は、世界最古の陶磁器生産の専門書である。

15) 宮内庁が浮梁地方における陶磁器製造監督事務所として浮梁瓷局を設置し、宮中用品を納めるようになった。

16) 2005年のイギリスのオークションでは、青花磁器「鬼谷下山」が2億3千元（約30億円）で落札されており、歴史的価値が高く評価されている。

17) 島田（2013）p.3.

18) トプカピ宮殿に代表される。

により、染付磁器の輸出量が大幅に拡大した。浮梁瓷局の管轄による大規模な官営手工業の動きの中で、1402年には景德鎮市の珠山に御器廠^{ぎよきしょう}と呼ばれる官窯が設置された¹⁹⁾。官窯は宮廷・官府の高級日用品と鑑賞用磁器の需要に応えることを目的としていたが、献上品や貿易品も含め大量の注文がされるようになり、官窯には莫大な資金が投じられた²⁰⁾。生産は細かい分業体制を敷いた大規模工場でおこなわれており、72の工程に分けられていた²¹⁾。明代の官窯では「八業三十六行」と言われ、「採土」「胚戸（成型）」「窯戸（焼成）」「紅店（加飾）」「匣鉢」「包装運送」「下足修補」「磁器道具」の8つの業に分業されて、工房が請け負っていた。更に、製品の器種や等級により「作」という単位で細かく細分化され、工房内でも分業が進んでいた。規模生産に必要な労働力を確保するために、政治的地位を使って民窯から熟練工を強制的に役務させる匠役制度が採られるようになった。また、不足する人材を確保するために、外部から優秀な人材を受け入れる賃金制度も採用されるようになった。官窯では熟練労働と単純労働が分離され、砂土を採掘運搬する砂土夫や重量のある器物を運搬する大量の非熟練工が必要とされ、景德鎮とその周辺地域から動員されていた²²⁾。

このような分業体制の確立により、職人が一つの工程に特化することで次第に熟練工が生まれ、品質が向上したばかりでなく、新たに卵殻磁、法瑯磁といった独自の製法も生まれている。この頃、景德鎮は1万人以上の陶工が従事する世界最大の陶磁器クラスターを形成していた²³⁾。細かい分業体制は、クラスター内で大勢の人々が生計を立てられることを可能とし、産地の生産性向上に貢献した。大規模²⁴⁾生産をおこなう官窯では品質が厳しくチェックされ、多品種にわたる高級品が扱われた。優れた工匠には官職が授与されるなど、昇進制度も用意されていた。洪武年間（1371—1395年）には海禁政策によりイスラムからのコバルトが途絶えたため、大型の鉢や盤、壺、玉壺春、梅瓶などの釉裏紅磁器が量産された。この時代の青花が元代に比べ暗く淡い色調なのは、コバルトが途絶えたために国内で産出される土青²⁵⁾を用いるようになったからだと考えられている。

永楽年間（1403—1424年）になると国家的貿易が再開され、コバルトの輸入も再開されたことから、青花が文様表現の中心となった。天球瓶や扁壺、僧帽壺、燭台、大型の盤など多彩な器形に東蓮文や唐草文が描かれた宣徳年間（1426—1436年）は、中国青花の黄金時代であった。この宣徳期には

19) 洪武2年（1369年）（『景德鎮陶録』）、洪武35年（1402年）（『江西大志』）、宣徳元年（1426年）など諸説あり。

20) 喻（2003）p.275によれば、1546年各省に焼成費用として銀11万両の徴収を追加したが、すぐに使いきったという。

21) 明末期の資料「天工開物」によれば、カオリンの発掘から窯焚きまで72の作業工程に分かれていた。

22) 礪陽県に64名、余干県に36名（後にこの県は砂土夫の免除を府に告げ、許された）、樂平県に38名、浮梁県に18名、万年県に7名、安仁県に10名、徳興県に17名いた（喻、前掲書、p.278.原典『江西大志・陶書』熊（収録）2000、p.175.）

23) 特集 江西省・景德鎮 変容する千年の焼き物の里（文：王浩）<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/200406/teji-1.htm>（2013.5.1参照）

24) 窯数では、民窯では平均2〜3、大規模でも5〜6基だったが、官窯では初期に20基、ピーク時には58基まで拡大された。（喻、前掲書、p.276）

25) 鉄分が少なく、マンガンを多く含んでいた。

豆彩（「斗・闘」）²⁶⁾ が誕生して、装飾性の高い精緻な作品が生産された。豆彩の発明により、従来の一次焼成技法の限界を超えた二次焼成技法が確立され、この結果釉上彩絵の分野は飛躍的に拡大した。特に五彩は、長年官窯以外には生産が許されなかった技法である。「宣徳8年、景德鎮に対して竜鳳磁器14万3500点を焼成せよと命令が下された」²⁷⁾ という記録からも、景德鎮が陶磁器産業として隆盛を極めた時代であったことが伺える。また、官窯の製品には初めて官窯銘が入られるようになった²⁸⁾。

このように、景德鎮では官窯の設立により官窯の御器廠と民窯の双方で磁器生産がされるようになり、官窯では献上品、民窯では日用品が生産されていった。官窯には生産を監督するために監陶官が置かれたが、監陶官として宮廷から派遣された宦官が御器廠管理の権利を独占することによる弊害も多く、地元の窯民や朝廷の大臣からの反発も強かった。このため1530年には監陶制度は一時的に停止されたが、後に江西省各府から監陶が派遣されるようになった。職人は匠役制度による官窯での服役を通じて自分の技能を向上させ新しい技術を習うことができ一方で、優秀な民窯の職人が官窯に吸収されていったことから、匠役制度は明中期には崩壊した。

嘉靖年間（1522－1566）頃には海外からの需要も増大して、御器廠への膨大な注文に対応するのが難しくなったことから、官窯から民間への焼造委託が実施されるようになり、いわゆる「官搭民焼」が定着した。その結果として、民窯の技術水準が向上し、高級品を扱う民窯が富裕階級の需要に応えるようになっていった。官窯では龍文や鳳凰文、花鳥文、魚藻文、蓮池水禽文、牡丹文が主流だったが、民窯では古赤絵なども生まれ、多彩で華麗な五彩磁器が作られ、文様の種類も増加した。次第に、官窯の厳格な作風による伝統的な写しが衰退し、民窯では吉祥文などの文様が多く見られるようになった。景德鎮の民窯では明代末期に「芙蓉手」と呼ばれる貿易用の大型盤が、オランダ東インド会社により欧州などに輸出され、官窯に代わって民窯が隆盛を極めるようになる。万暦年間（1573－1620年）には五彩磁器の器種が増大し、尊²⁹⁾、香炉、燭台などの大型の調度類や筆箱、硯、筆管、筆架などの文房具類も造られるようになった。清朝初期には欧州向けの青花も焼成されている。17世紀初頭からオランダ、イギリスの商船によって大量にヨーロッパに輸出されると同時に、ロシア帝国や日本、東南アジアへの輸出も拡大し、景德鎮の製法技術は大きく発展した。

このように明代の嘉靖・隆慶・万暦の約100年間で、景德鎮の青花磁器の第二の隆盛期で、生産量・種類ともに頂点に達した。明代に始まった磁器の大量輸出は、青花磁器の造形の多様性と、装飾文様の変化をもたらし、従来の刻花・印花・彫花から多種多様な絵画へと発展し、文様は生活に密着

26) 「文様の輪郭を青花の細い線描きであらわし、いったん本焼きしたのち、上絵具を丁寧に塗り分けて焼き付けている。「斗・闘」と書かれるのは、緑を中心として他の色と闘う「競い合う」という意味。上絵（景德鎮では粉彩と言う）の豆はグリーン（緑）を基調としている。」（二十歩文雄氏）

27) 島田、前掲書、p.3.

28) 宣徳時代は「青花は宣徳」といわれ、その作品の多くに「大明宣徳年製」の銘が入られた。喩、前掲書、p.281.

29) 大きく開いた口縁をもち、強く膨らんだ胴によく張った脚がついた器形

した親しみを感じさせるものとなっていった。官窯を中心として発達した青花や釉里紅³⁰⁾に代表される釉下彩絵技術、豆彩・三彩・五彩に代表される釉上彩絵技術などの磁器製法が民窯にも及び、陶磁クラスターの生産性向上をもたらした。

④清時代前期（1636—1795 年）

戦乱を経て荒廃した官窯は 1660 年に一時的に閉鎖されたが、政治が安定した康熙 19（1680）年頃には御器廠も再開³¹⁾され、雍正・乾隆帝時代まで再び景德鎮の隆盛期を迎える。清代には御器廠は「ぎようようしやう御窯廠」と改名された。監陶官には、磁器生産の専門知識と事業意欲を持つ地方長官や内務府の有能な人材があたりようになった³²⁾。この時代には、洗練された三彩磁器や端正な五彩が見られる。景德鎮では、宮廷内の内務府造辦処琺瑯作で絵付けされていた琺瑯彩の技法を土台として、釉上彩の粉彩の技法が開発された。雍正年間（1723—1735 年）になると、この技法には更にグラデーションが表現されるようになり、写実的な花鳥文も描かれるようになったことで、官窯の青花磁器は衰退し、色絵磁器が頂点を極めていった。更に、乾隆年間（1736—1795 年）には技法が更に精緻化されていった。官窯の技術発展を支えたのが、年希堯と唐英の二人の監陶官であった。明初期の 1402 年に設立された官窯は清朝前期の康熙・雍正・乾隆の約 130 年間に黄金時代を現出し、唐英が景德鎮を去る 1756 年まで技術の頂点を極めた。佐久間（1999）は、清初の陶磁文化の発展の要因として①歴代皇帝が中国文化ばかりでなく外来文化の吸収にも積極的であったこと、②督造官にすぐれた人材を得たこと、③官窯の陶磁焼造が中央財源により賄われており地方の負担を軽減していたこと、④官窯が匠役制から雇役制に代わったことで自主性と積極性が高められたことをあげ、「このことは、当時の商品流通機構のなかで民窯の商品生産をいっそう促進することにもなった」³³⁾と述べている。

⑤まとめ

以上のように、景德鎮では元・明・清代を通して、宮廷御用達の官窯と、一般市場向けに昔の技術や伝統を受け継ぎながら民衆が使う雑器を焼く民窯が置かれ、国内外に輸出されていった。特に需要が急増して官窯の生産が追いつかなくなった明・清代には、官窯から流れた原材料や工芸技術により民窯の技術が著しく向上し、景德鎮は品質と生産量の多さから世界の磁器産地としての不動の地位を確立するようになる。

30) (ゆうりこう・ゆうりほん),「釉裏紅・裏と書く場合もある。釉葉の下・裏,稀には釉葉の上に描く場合もある。」(二十歩文雄氏)

31) 徐廷弼, 李廷禧が監陶官に任じられ, 工場の修繕・整備, 技術者の招聘, 材料の調達などを進め, 3 年かけて再開した。1683 年には臧応選と車爾徳が監陶官となり, 宮廷所属の磁器職人劉源の貢献により成功した。

32) 「江西巡撫の臧応選, 郎廷極, そして内務府官僚の年希堯と唐英はそれぞれの時代を開いた。彼等の共通点は磁器生産に対する専門知識を有し, 高い事業意識を持った官僚エリートであった。」(前掲書, p.280.)

33) 佐久間 (1999) p.45.

3) 清時代後期以降の景德鎮

しかしその後、嘉慶年間（1796—1820年）になると倭約が奨励され財政が緊縮されたことから、御器廠の生産量も減少した。太平天国の戦火（1851—64年）で破壊された景德鎮では御器廠の活動も停止したが、1866年には李鴻章により蔡錦青を監督官として御器廠の建物が再建され、特に1874年からは古器の模倣を中心とした生産が再開された。もっとも、清代初期の隆盛期に比較するとはるかに少量生産で、官窯に新技法の開発力はなく、民窯のほうが倣古技術も進んでいた。清代末期には宋・元代の磁器や単色釉の倣古磁器が多く、この頃は清代初期の優れた製品が普及したと同時に、宋・元時代の文化の高さが見直されて研究が進んでいったことがうかがえる。その後、明代の倣古磁器も作られるようになり、清代末期から中華民国（1912—1949年）初年にかけて倣作技術は著しく向上した。この理由としては、官窯の優れた技術者が拡散したことで倣作を許されていなかった御用達品が自由に模倣できるようになったことや、官窯の作品がヨーロッパにおいて高値で取引されていたこともあって、顔料の研究も進み、選抜された熟練者が極めて精巧な倣古を製作するようになったことがあげられる。景德鎮には過去の秀作を自ら再現しようとする気風が溢れていた。王琦、鄧碧珊、徐仲南、田鶴仙、王大凡、程意亭、汪野亭、劉雨今は景德鎮の八大名家と呼ばれるようになり、この他にも優れた陶工たちが出現した。1911年の革命以降戦乱が続く中、中国の磁器生産は衰退したものの、景德鎮では倣古磁器の生産が続いていた。

第二次世界大戦後1949年に中華人民共和国が成立すると、景德鎮を復興するために、景德鎮に十数の国営工場が建設された。紅旗陶磁工場、宇宙陶磁工場、東風陶磁工場、紅星陶磁工場、曙光陶磁工場、光明陶磁工場、芸術陶磁工場、人民陶磁工場、建國陶磁工場、景興陶磁工場の十大工場のほか、为民陶磁工場、華風陶磁工場、紅光陶磁工場、新光陶磁工場、彫塑陶磁工場などの十数社の工場を総じて「十大陶磁工場」と呼ぶ。各工場には特徴があり、「国窯磁は清の模倣品、紅旗は中南海用、彫塑は人形、宇宙は国窯の分工場で輸出・国内宴会用食器、新華は少数民族用、紅星は日用品、景興は結婚式用、曙光は庭用、光明はほたる茶碗、芸術は芸術品を生産し、国空は模造技術が最も高かった」³⁴⁾という。国家の計画に基づき、国が生産と販売を指令する体制では、以前のような芸術性の高い磁器は衰退し、生活用品としての磁器生産に重点が置かれるようになった。

1950年代には地主や資本家などの私有財産は没収され、更に公私合営³⁵⁾をおこなったことで私企業はなくなり、工場は行政幹部が支配するようになった。共産党下では、製品に個人銘を入れて価値が上がるようなことは許されていなかったが、伝統継承のために1953年には景德鎮市陶瓷館が設立されている。もっとも1966年からの文化大革命（1966—77年）では、封建的・資本主義的文化が批判され、復興しつつあった文化芸術の関係者たちは農村に追放され、「景德鎮でも多くの技術者たちが再教育のために農村に追放されたため、文化・芸術復興への芽が摘み取られてしまった」³⁶⁾。文

34) 景德鎮十大陶磁工場歴史博物館館長 李勝利氏

35) 公有財産と私有財産を合併。

36) 李勝利氏

革の間は、模造品の製造も一切禁じられていた。

その後 1978 年に鄧小平³⁷⁾による開放経済体制に移行すると、市場経済が導入され、経済が急速に拡大発展した結果、規模の小さな私営企業が次第に発達していったが、これらの民間企業は資金力不足で生産面では遅れを取っていた。長期的目標を持たなくなっていた国営工場生産は、80 年代に入ると工場長の生産下請け責任制となり、工場長の経営業績が評価されるようになった。これに伴い、工場長の任期期間中に経営業績を残すことが求められ、長期的な経営目標を持つことがなくなった。さらに解放政策が進行した 90 年代になると、景気の悪化により景德鎮全体の生産量も落ち込んだ。国営工場は企業改革に着手せざるを得なくなり、所有権と経営権の分離を図るため国営企業から国有企業と改められた。実質的に国営工場は解体されて今は研究機関を残すのみとなり、景德鎮の陶磁器生産は民間の私企業が担うことになった³⁸⁾。

一方、かつての景德鎮の官窯製品は、希少性と骨董的価値から国際市場のオークションで高額で落札されており、既に一般大衆には手の届かないものになっていた。このため、1980 年代末頃から香港・マカオ・シンガポールなどの海外商社が、景德鎮に対し鑑賞用陶磁器の大量生産注文をするようになり、景德鎮の陶磁器には新たな需要が生まれてきた。90 年代以降は、こうした需要に応えるために、景德鎮とその周辺地域では多種多様な伝統的陶磁器を模倣した倣古磁器が大量に生産されるようになった。また、景德鎮には陶瓷学院の教授陣をはじめとして、創造的な芸術作品を手掛ける芸術家も多く集まるようになった。このため景德鎮全体では、量産の日用品や工業用品に加え、工芸美術品の分野では創作芸術品と伝統的絵付磁器（倣古磁器）の 2 つの流派に分かれた生産がおこなわれている。

3. 官窯と民窯の役割の変化

次に、景德鎮における官窯と民窯の役割の変化についてまとめておく。

前述のように、景德鎮では五代、宋、元の王朝を経て窯業が発達し、明、清の時代に中国を代表する陶磁器クラスターが形成された。景德鎮は対外貿易で重要な役割を果たし、宋代から始まった磁器の輸出は、元代には染付がイスラム圏を中心に輸出され、明・清時代にはオランダの東インド会社、スペイン、ポルトガル、イギリス、ロシア、更に日本の茶人たちによって輸出が隆盛し、世界に普及していった。その高い生産技術は世界をリードし、朝鮮、ベトナム、タイといった隣国から、

37) 「私の体験では 80 年代、90 年代を通して文革当時にメチャクチャになったあらゆる情報と体系が鄧小平の改革開放路線、南巡講話をきっかけに堰を切ったように復元され始め、縦令其れが拜金主義の跋扈を招き玉石混交とはいえ大量の書籍が復刊、上梓されるに至ったことで春雨の地を潤すが如く国民の知への渴望を癒し、伝統への回帰を促した。」（景德鎮小雅窯外事部長）

38) 鄧小平の政策により、現在では景德鎮の国有工場は私有化、個人化されており、国有工場は工場長を置いて研究所として会社の組織を残すのみとなり、従業員は抱えていない。

日本、ペルシア、東アフリカ、ヨーロッパへと伝播していった。この需要を支えたのが宮廷用の官窯と一般市場向けの民窯であった。

官窯の技術や上質なコバルトなどの原材料は流出が固く禁じられていたが、民窯は官窯の労働力に組み込まれていたことから技術革新が進み、次第に「官塔民焼」体制となって、官窯は民窯に生産を委託するようになった。貨幣経済が未発達な段階では成立していた無償の匠役制度も、銀を主要通貨とする「班銀制」による貨幣経済の発達により、官窯では工匠が不足するようになり、民間に委託する注文生産が開始された³⁹⁾。国家から際限なく経費を保障されている官窯ではコスト意識が低く、最高品質の製品製造・開発がおこなわれていた。官窯では器を窯に詰め込み過ぎず、火加減が最もよい中心部のみに置かれていた。このため、官窯の焼成効率は民窯の3分の1以下であった。

官窯では多くの職人と非熟練労働者を秩序よく動かすために、階層的な管理組織が構成された。上級管理官には、陶磁器の知識を持つ優れたエリートが代々続き、工匠制度により優れた人材を確保していった。彼らには昇進というモチベーションが与えられ、新技法が開発されていった。工匠制度は労役の苦痛を伴いながらも、工匠にとっても官窯の技術を学び、自分の技能を上げるよい機会となっていた。官窯は高度な職業訓練の場を提供していたことになる。官匠たちは官窯での仕事を終えると自由な創業を認められるようになり、技術や組織管理のノウハウを民窯に持ち込んでいった。その後の匠役制の崩壊で、民窯に生産委託制度が確立され、官窯から民窯への技術伝播は更に活発になった。民窯の技術向上が官塔民焼の成立条件でもあったので、意図的な技術移転も進められていく。

人員の水増しや、横暴で残虐な宦官の行為などが判明して官窯には不満ももたらされたが、官窯の経営改革の中で賃金制が導入されると、職人はインセンティブを持つようになり生産性が高まった。この結果、コスト意識も高まり、抱えていた在庫は民窯に放出されていった。これが民窯の模倣品の手本となるが、既に官窯の技術も民窯に移転されていた。

明中期に官窯から委託された民窯は慎重に選定され、「約900軒あった中でわずか20軒であった」⁴⁰⁾という。これらの窯は青窯と呼ばれた。当初は臨時的措置として採られていた委託も、次第に委託料が支払われるようになり、清代になると自由意志による取引となって、市場価格による下請け料が支払われるようになった。民窯では品質向上のために設備投資が進み、高度な熟練が必要とされるようになったことから、分業も進んでいった。こうした分業により、工房は手作業工場へと規模が拡大し、官窯による原材料の良質磁土やコバルトの独占も崩れ、官民の協働作業による生産が進んでいった。

しかし、1949年の中華人民共和国の設立で、民窯は公有化され、数千あった窯業業者は十社の大型国営企業に再編された。ここでは近代的機械と設備が導入され、手工生産は徹底的に排除されて、

39) 喻、前掲書、p.284

40) 同上、p.286

機械化による量産体制を進めていった。国有工場による皿や茶碗などの日用品の量産が主となり、景德鎮が得意とする鑑賞用の陶磁器は無用な贅沢品として厳しく制限されたため、これらの優れた技術は姿を消し、1980年代からの国有工場は市場経済に適応しない経営体制から経営不振となり倒産していった。この時期に発生した多数の家庭工業的な小規模工場が、現在は景德鎮の窯業の中心となっている。

4. 景德鎮の現状

1) 概要

景德鎮の人口は約162万人⁴¹⁾、市街地人口は約50万人で、8万人以上が陶磁器業に携わっており⁴²⁾、工場は大小合わせると5千以上に及ぶ⁴³⁾。大半が小規模企業で、中規模以上の企業は100社弱、総従業員数は10万人を超えており、陶磁器産業生産高は200億元を超える見込みである⁴⁴⁾。景德鎮市瓷局⁴⁵⁾によれば、市の経済活動の約3割が陶磁器によるものだという⁴⁶⁾。中国全体では2011年に日用陶磁器生産数が300億個を突破し、生産高は849億元、タイルなどの工業用陶磁器生産高は6,000億元に達している⁴⁷⁾。

中国の元号千年にあたる2004年には大規模な景德鎮命名千年祭が開催され、これを契機に街路灯は染付のタイル支柱が建てられ、薪窯はガス窯に代わり、御窯跡の発掘も行われた。市内には「景德鎮陶磁器博物館」「中国陶瓷城」「国際陶磁器博覧センター」など多くの陶磁器関連施設が作られ、毎年10月には大規模な中国景德鎮国際陶瓷博覧会が開催されている。空港近くには工業区が設置され、大企業の大半がこの地区に位置する。十大国有企業を統括していた市瓷局は、現在では主に外資企業を工業区に誘致する役目を担い、政府が土地を貸し、生産・輸出に関して海外企業に投資を促すといった協力・提携関係を結んでいる。かつて街の中心に位置した国有工場は、小工場や陶房・ギャラリーとして民間に払い下げられ、窯業の事業活動に使用されている。

中国国内の国家級美術工芸家20数名のうち12名が景德鎮在住であるが、景德鎮では一家三代に

41) 景德鎮市瓷局 2011年12月時点

42) 朝日新聞 2004. 6.17による。新華通信社、李翔華氏によれば、市民の7割が携わり、2千以上の陶磁製造工場がある。(2012.6. 23) 二十歩文雄氏によれば、人口は公称157万人、そのうち20%が陶磁業関係者であり、20万人に及ぶ。陶磁局によれば人口の5割が陶磁器関連業に携わる。

また、景德鎮の陶磁器を扱う「ル・ノーブル」(本社：京都府長岡京市)によれば、製造工場2千社以上、人口50万人のうち約10万人が磁器関連の仕事に携わっている。

43) 済龍 China Press 2013年1月21日

44) 同上

45) 陶磁器産業発展のために設置された行政機関

46) 景德鎮には絵具専門店や、土を扱う業者(約10社)もある。

47) 済龍 China Press 2012年5月17日

わたり陶芸に従事し功績のあった家には、地元政府が「陶磁世家」の称号を授与している⁴⁸⁾。「景德鎮陶磁学院」など陶磁専門学科をもつ学校には、陶磁器の製造技術を学ぶために全国から学生が集まり入試倍率も高い。今日では歴史的に有名な陶磁器生産の中心地として、世界中から毎年5～6百人の陶芸家や学者もやってくる⁴⁹⁾。

同じような伝統的日用品ばかり生産していた景德鎮の陶磁業も変化をみせ、近年では近代的な日用品や芸術品に力点が置かれるようになり、衛生陶器、工業用、エレクトロニクス用など多方面にわたる陶磁器も生産している。建築用としては瓦が多く、広東省を主な市場とするという。中堅企業ではあるが、航空工業、自動車産業に使用される磁器生産も行われている。陶瓷局が台湾や日本企業の誘致も進めた結果、2002年から2004年にかけて景德鎮の陶磁器産業はようやく回復の兆しを見せ、2002年に16億元だったGDPが10倍になったという⁵⁰⁾。このように資本誘致は景德鎮に経済と集積双方の波及効果をもたらしたが、陶磁器生産量では陶器と磁器の両方が生産されている広東省・佛山市が景德鎮を抜いたこともあり、かつて世界の一大陶磁器産地も厳しい競争環境にさらされている。佛山は沿海にあるため物流にも便利で、労働人口も多い。景德鎮は磁器の生産量は国内一位だが、「陶磁器」という括りでは中国一の生産地としての座を引き渡したことになる。

2) 陶磁政策

景德鎮の陶磁政策は、国家政策でもあり地方の政策でもある。文化予算というよりは支援プロジェクトにより、土地の貸与などの便宜を図ることを主とした政策である。年一度の国際陶瓷博覧会も貿易上の大きな機会を付与している。観光政策として、古い工場や遺跡により、歴史的つながりを観光客に示し、跡地を利用してアーティストがアトリエとして利用したり、陶磁を使った景観づくりなどもおこなっている。陶磁器のキーホルダーや記念品など観光グッズも製作する。政府の支援もあり、陶瓷局では景德鎮の陶磁器産業の発達のために優遇政策を実施してきた。

陶瓷局では、景德鎮の産業クラスターを構築するメリットとして以下の5点をあげている。

a. 都市ブランドとしてのメリット

景德鎮は陶磁の発祥地として、陶磁器を連想させる知名度があることから差別化がしやすく、外部資本も投入されるようになってきている。景德鎮で制作することで自らのステイタスも上がる。青花など4大銘柄が国家商標として登録されている。

48) 特集 江西省・景德鎮 変容する千年の焼き物の里（その2）「新世紀に挑む現代の名工たち」<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/teji/200406/teji-2.htm>（2013.4.2 参照）

49) 景德鎮陶磁学院の秦錫麟名誉院長の言葉

特集 江西省・景德鎮 変容する千年の焼き物の里（その3）「中国陶磁器の魅力と景德鎮の将来」<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/teji/200406/teji-3.htm>（2013.5.2 参照）

50) 景德鎮市瓷局

b. 文化的側面

陶磁器の稀少で長い歴史を持つ景德鎮の市内には多くの遺跡があり、独特な文化を育成してきた。現代の陶磁器芸術の中心として人材も集中している。国家級の間人国宝が約 50 名、省級 119 名、陶磁器の教授・副教授約 150 名、高級芸術職人 1 万人を抱える文化都市である⁵¹⁾。陶磁器と絵画を目指して人々が集まって来るので、文化産業の発展のための「場」を提供している。

c. 科学技術としての役割

2004 年に国家技術部が許可され、科学技術城が設けられた。人材育成には後述の学生 2 万人を抱える景德鎮陶磁学院があたり、高級日常陶磁器の技術により日用品（トイレ）なども製造している。江西省の景德鎮陶磁器科学技術工業園区は 1.7 万平方メートルの広大な敷地を持ち、ハイテク技術を持つ企業を集中誘致している。

d. 貿易

毎年開催される景德鎮国際陶磁博覧会は商務省と江西省が支援しており、貿易にも大きく貢献している。当初は誘致が進まなかった⁵²⁾というが、行政のバックアップも受けて年々規模を広げている。

この景德鎮国際陶磁博覧会は 2004 年に開始され、2013 年に 10 周年を迎えた。2013 年には、中国陶磁博物館から市内北東部に新たに設立された景德鎮国際陶磁文化交流中心（ICOC）に会場を移し、10 月 18 日から 22 日の 5 日間にかけて開催された。景德鎮陶磁学院客員教授二十歩文雄氏によれば、「21.5 万 m²、建設費 4 億元が投資されているこの景德鎮の新しい陶芸文化の中心として開発されている地区には、国宝級陶芸家作陶施設、展示館、ギャラリー街、省・市級の認定陶芸家の作陶施設、中青年陶芸家作陶施設、5 星ホテル、レストラン、陶磁器物流施設、国宝博物館、マンション群、広大な専用駐車場などが建設予定である」という。2012 年には 700 社以上が参加、1759 のブースが展開され、世界各国から 4,200 人以上のバイヤーが参加する予定⁵³⁾とされていたが、更に規模を拡大し、2013 年には 10 月 18 日の開幕式だけでも約 5,000 人の来賓が入場している⁵⁴⁾。2004 年以来、これまでに 49 개국から 5,000 以上の展示企業、4 万人以上の入場者、120 万人の観光客を集客してきた⁵⁵⁾。展示会の特徴としては①プロの展示会としてのレベルの高さ、②出展企業の地域の幅広さ、③製品レンジの広さ、④世界各国からの参加、⑤陶磁器拠点としての力強さ、の 5 点があげられている⁵⁶⁾。行政の強いバックアップのもとで、レベルの高い展示会となっており、国内の多様な産地から工芸美術品、日用品から工業製品まで幅広い展示がおこなわれ、中国の陶磁器の中心としての存在感をアピールすることに尽力している。

51) 景德鎮市瓷局

52) 同上

53) 済龍 China Press 2012 年 10 月 19 日

54) 開幕式のみ入場券が必要となる。

55) Ceramic Fair The 10th Fair Guide, p.11.

56) 同上, pp.11-12.

展示会場は3つの建物に分かれており、2013年はA館には国内外有名企業の出店、世界各国からの公募方式による受賞作品を集めた第2回カオリン杯陶芸作品展⁵⁷⁾、B館には国内主要地域の工芸美術品と日用陶磁、C館には日用品、機材、原料、学生作品の展示がされている。海外企業では、リモージュ、リヤドロ、ウェッジウッドなどヨーロッパの主要メーカーをはじめ、利川（韓国）、北朝鮮、ベトナム、アフリカなど世界各国から出店されており、日本からは九谷焼や京セラなどが出店している。2012年には日中関係の影響で日本ブースは全面閉鎖となったが、2013年度も出展は少なかった。

中国景德鎮国際陶瓷博覧会は、業界内における高い知名度と影響力が評価され、2012年度まで3年連続で中国展示会産業金指賞を受賞している。展示会では各ブースで熱心な商談がおこなわれており、国際化、ブランディング、プロモーション、文化交流の重要なプラットフォームとなっている。

e. 人材育成

景德鎮は人件費の安さが量産を支えている。江西陶瓷工芸美術職業技術学院、景德鎮陶磁器高等専科学校の2つの短大⁵⁸⁾（専科大学）もあり、毎年多数の卒業生を排出している⁵⁹⁾。景德鎮では人口の3分の2は何らかの形で陶磁器に関わっているが、生活環境も整っていて、人件費も相対的に安い。関連産業の生産チェーンもあり、窯・道具・原料など陶磁器を作るための全てのものが調達でき、他の地域にはない環境が整っている。

中国で唯一の陶磁教育機関である景德鎮陶瓷学院は、1909年に設立された陶磁学校を母体としており、1958年に再構築・名称変更された。幅広い知識を持つ陶磁専門家を養成するための大学として、国内31国立大学の一つとなっている。工学部、設計芸術、機械工学、経営、情報技術、外国語、社会科学、体育など11学部を有し、教職員1,100名、学生数15,000名を抱える総合大学で、市内の旧校舎に加え郊外に新校舎も設立され、広大な敷地で総合的な教育がおこなわれている。

陶瓷学院だけでも、学生数4,000名、教員200名という規模の大きい学部で、学院の卒業生や美大の卒業生が教授にあたっている。学生の約8割は陶芸家としての独立を目指しており、実際に8割が陶磁器関連企業へ就職する。大半は倣古を希望するが、自由作家を目指す学生もあり、経済状況がよいことを示している。授業料は、2008年現在、学部で芸術系年間24,000元、修士28,000元で、海外からの留学生も多く⁶⁰⁾、中国語のプログラムや宿舍なども用意されている⁶¹⁾。

官主導では、陶瓷学院のほか、省や市の三大研究所が芸術制作に取り組んでいる。

57) 応募数は国内1700点、海外500点で41か国からの参加者があった。入選・受賞作品160点が展示されていた。（二十歩文雄氏）

58) 中国では短大は3年制。

59) 前述の広東省佛山には景德鎮の卒業生約5千人が働いているという。

60) 2013年現在 約80人

61) Studying in Jingdezhen ceramic Institute 2008 留学生用パンフレット

3) 景德鎮陶磁器のマーケット

次に、景德鎮の磁器製品のマーケットについて、工芸美術品を中心にみていくことにする。

①製品

景德鎮の代表的な陶磁器は工芸美術品、日用生活品、建築用に大別される。この中で2011年12月のヒアリングによれば、最も活気があるのは工芸美術品で、次に日用生活品、建築用と続く⁶²⁾。日用品と工業用セラミックスは先進国に遅れを取っている⁶³⁾とみられる。

国営工場時代には私有企業がなかったため民間で芸術品を扱うこともなかったが、鄧小平時代が終焉すると国有企業は芸術の研究所を残すのみとなり、民間企業が日用品から工芸美術品へ参入するようになった。もともと中国人は経営者（老板）になりたいという上昇志向が強い。独立志向が強く、個人がすぐに工房を構えるため、景德鎮周辺には工房が立ち並び、せめぎ合っている。

工芸美術品については前衛的な陶芸学院派と、伝統的デザイン（山水、花など）を好む伝統派に分かれている⁶⁴⁾。公務員である陶芸学院教授陣は生活が保障されているために、制作は創作芸術品に専念する者が多く、これらの芸術品は総じて学院派と呼ばれている⁶⁵⁾。「中国でも生活が豊かになるにつれて、好みのものを買うようになってきている」⁶⁶⁾ことから、陶芸学院周辺の中心街には作家の高級作品を取り扱うギャラリーが増加を続けており、「コレクターも斬新的な学院派を好む傾向にある」⁶⁷⁾という。景德鎮陶芸学院の秦錫麟名誉院長は、景德鎮の製陶業の発達のために、現代の陶芸家は①国際性、②民族性、③地域性、④個性を備えていることが不可欠であり、優れた伝統を継承しながら創造を加える必要があるとし、「景德鎮はいわば世界の陶磁器の都であり、深くて厚い文化の蓄積がある。陶芸家にとってここに住んでいることが創作の源泉になる」⁶⁸⁾と語る。

もっとも「顧客はよいものを欲しがっているが、よい製品は少なく、企業からも『よいもの』への要望が強い」⁶⁹⁾という。但しここで言う「よい」とは、派手なもの、豪華なものを指し、顧客は陶磁器として「よい」ものを見分ける鑑識眼は持っていない。陶芸学院二十歩文雄客員教授も「そこまでの顧客のレベルは育っていない」⁷⁰⁾と語る。非日用的なオーナメントに対し、器を購入する層には、①私有企業のオーナー、②官僚（官官接待の贈答品）、③サラリーマン層（趣味として）の三種類が存在する。官僚は人間関係のためだが、①や③は投機目的である。ところが、2012年11月に共産党

62) 東方好友陶磁有限公司 徐莉副社長

63) 秦錫麟名誉院長の言葉

特集 江西省・景德鎮 変容する千年の焼き物の里（その3）「中国陶磁器の魅力と景德鎮の将来」<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/teji/200406/teji-3.htm>（2013.5.2 参照）

64) 伝統派の一部には陶磁学院卒もいるが、イメージや風格が伝統的な作品は後者に属する。

65) 民間にも、芸術品制作をする人々は存在する。

66) 二十歩文雄氏

67) 徐莉氏

68) 特集 江西省・景德鎮 変容する千年の焼き物の里（その3）「中国陶磁器の魅力と景德鎮の将来」

69) 徐莉氏

70) 二十歩文雄氏

大会で習近平が総書記に就任して以来、綱紀肅正令により官費の無駄遣いや官官接待、贈答行為などが厳しく禁止され、汚職摘発にも積極的な姿勢が示されているために、これらの高額製品群の需要は激減している。このため、芸術品を手掛ける作家の売上も2010年をピークに半減している⁷¹⁾。

芸術品と日用品の作家は明確に分かれており、作家が制作する食器は茶器・酒器など嗜好品に限られている。料理のために使用されるような高級日用品はほとんど存在しない。芸術作家が高級日用品を手掛けることはなく、国内の所得水準が急速に上昇する中で、将来的にニーズが高まると思われるこのセグメントは、マイセンなど海外企業に浸食されてしまう可能性もある。景德鎮国際陶瓷博覧会には、前述のようにウェッジウッドやリモージュをはじめ高級食器を手掛ける有名企業も出展している。「景德鎮の高級レストランに行っても食器のレベルは低い。文化性を持った陶磁器を作る必要がある」⁷²⁾と考える作家はまだ少数派だが、今後国内でも核家族化が進めば、宴会用の食器ばかりでなく、こだわりを持ったオリジナルな食器のニーズも増加すると思われる。問屋制度が発達していない景德鎮では、企業が独自ルートを開発しているため、市場ニーズについては自主的に把握することになる。企業は市場ニーズに合わせて新製品開発を進め、政府はアイデアコンペ（日用品、おみやげ、色など）などで賞によるインセンティブとして貢献しているが、需給のマッチングはうまく機能していないのが現状である。「景德鎮には、長年培って来た伝統的な技術はなくなってしまった」⁷³⁾という声も聞かれ、原材料についても同じことが言える。一部の作家は陶土にもこだわりを持ち、独自のルートで農民が掘った土を購入して土練りからおこなっているものの、元来国家管理下にある土地から採取される土は特定業者が統括することになっており、実際には、景德鎮の良質な土が他産地のものと混ざって販売されている⁷⁴⁾。このため、かつてのような良質な陶土を入手することも難しくなっている。

景德鎮の三大ブランドとしては博大陶磁、玉柏陶磁、貝玉陶磁があげられる。企業に所属する作家は量産することができるが、個人の独立した作家は量産でないところに価値を見出している。独立した作家の製品企画には、流通側のアドバイスと制作者側のクリエイティブな部分の双方が存在する。北京の販売店副社長徐莉氏によれば、「流通側は製品企画するというよりは、エンドユーザーの要望をそのまま伝える役割を果たしており、多くの作家はそれらのアドバイスをそのまま受け入れる」という。トータルのデザインをするには、最初から独自に制作している場合に限られるが、景德鎮では芸術品についても一人の作家がはじめから終わりまで一貫して制作するのは稀で、作家は職人集団に支えられているため、企画力とデザイン開発力があれば独立できる環境にある。

もっとも、北京の東方友好陶磁有限公司副社長（副総経理）徐莉氏は、「景德鎮の技術は部分的に、特に道具に関しては昔より向上しているが、全体の技術水準が上がっているとは言えず、現在のニー

71) 作家 江訓清氏

72) 同上

73) 景德鎮嘉加陶磁公司和高如勇社長

74) 宋小凡氏

ズに合うものが作れていない状況である」と述べている。景德鎮もかつては絵付け中心ということはなく成形にも力を入れていた。しかし「景德鎮の焼き物の精髓は、絵にある。絵の革新と創造は、景德鎮が長く陶磁器の都となってきた重要な理由だ。」⁷⁵⁾という言葉にも表れるように、現在の景德鎮は絵付けを強みとして打ち出している。このため成形は適当でよいという考えがあるという。陶瓷学院二十歩文雄客員教授も「景德鎮では轆轤は中卒がする仕事で、絵付の方が圧倒的に格上だ。人間国宝級でも轆轤はひけない」⁷⁶⁾と述べる。また陶瓷学院施弟教授は、「日用品については江南省などから材料や半製品を購入し、絵付けだけ景德鎮ですることも多い」と指摘する。日用品に関しては、製品企画をするイノベーターの役割は景德鎮の地元市民が担っているが、大企業がほとんどないことから、後述するように小規模企業間は協力関係にある。

また、景德鎮では安い労働力を利用して、ヨーロッパや日本企業との磁器企業との提携を OEM 製造も盛んである。例えば日本土岐市の陶磁製造及び商社である山加商店と提携関係にある景德鎮嘉加陶磁公司では、日本の外食産業の食器やディズニーランドの製品をはじめ、コンビニの景品などが大規模な工場で生産されている。日本企業の品質水準に合致する製造は検品回数も多く、合格率を上げるために下焼きをするなどでコストが嵩むために、赤字になりがちである。和高社長によれば、「高品質の製品を作るには設備が3割、人が7割」という。同工場では優れた品質管理により、2005年の設立時には検品合格率27%だったものが2013年現在75%まで上昇しているが、中国企業にとって日本が要求する高度な品質水準をクリアするのは容易ではなく、「日本企業の品質水準をクリアできる中国国内の企業は3～4社」しかないという。「目がよく手先が器用な若い女性を雇用しやすいこともあり、中国のほうが転写はうまい」⁷⁷⁾というが、品質水準の維持とコストは常にトレード・オフの関係にある。

②価格

工芸美術品の価格は、作家の意見を聞きながら、市場のニーズをみて決められる。陶瓷学院の教授陣は、講師、助教授、教授といった地位により価格の相場が決まっている。教授陣は、昇進にも影響するため総じて制作や販売に熱心で、ビジネス志向が強い。芸術作品を手掛ける陶瓷学院師弟教授は「景德鎮にいた方が売れやすい。もちろん外に出て自分を宣伝したり、アピールすることも必要だ」と語る。

中国の陶磁文化も、現在はコレクションとしての価値だけが重視される傾向にある。コレクターは北京に最も多く、北京では最高級の展示会が開催されている。このため、国内の評価としては景德鎮よりも北京のほうが重要な市場と捉えられている。北京、上海、広州の三大都市が中国市場の

75) 景德鎮陶磁学院美術学部副主任王安維氏の言葉

<http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/teji/200406/teji-2.htm> (2013.5.2 参照)

76) 二十歩文雄氏

77) 和高勇氏

中心である。販売する地域によっても値づけが異なり、北京と上海では高値で購入される製品の産地も異なる。流通側からすれば、「景德鎮は中国の一つの産地という位置づけに過ぎず、景德鎮は取り扱う製品の数が多いものの、景德鎮だから価値が高くなるというわけではない」⁷⁸⁾という。中国国内の工芸美術品の主な産地には、江西省、湖南省、河南省、山西省、河北省、山東省など10カ所以上あり、各地域の特色も異なる。エンドユーザーには、価格が安いこともあって景德鎮よりも浙江省や潮州の陶磁器の人気の高いという。景德鎮には作家や教授の数が多いが、人間国宝級の作家は景德鎮にばかりでなく全国に点在している。北京では高級日用品として、潮州（龍泉）のシリコン、玉を混ぜた1セット1万元以上のものも販売されているが、景德鎮製のものは壺などの大型製品が多く、高級日用品は流通していない。

ブランド管理に関しては、陶磁器には普及品から高級品まで品質管理の基準があるが、陶器には品質基準が存在しない。「輸出に関しては、検測局と監督局による検品がおこなわれており、特に監督局では明確かつ詳細な基準があり、海外の基準を用いることで税関としての歯止めを果たしている」⁷⁹⁾という。もっとも、製品の品質保証については企業独自の基準が最も重要で、監督局の役割は基本的には本物を支援することにより偽物を排除する方向にあるという。市陶瓷局では粗悪品はその場で壊すようにアドバイスしているが、零細企業が多いこともあって廃棄するのは難しいのが実情である。結局、自社で品質のランクをつけ価格設定を変えることで、二級品以下の製品も価格を下げて出荷してしまう。徐莉氏は「景德鎮市政府は、まだブランド管理について意識を持っていない」と指摘する。中国では「よいデザインがあってもすぐに型屋に売ってしまうことから、他社にすぐに真似されてしまう」⁸⁰⁾という。ブランド管理は国や地方政府に託されているが、実際には、市政府には保護に対する認識も薄く、特に対外的な宣伝や保護はうまく機能していない状況にある⁸¹⁾。「役人が4年ごとに交代してしまうので、短期的な成果しか見ていない。役所が個人プレーをさせてしまっている」⁸²⁾ことも背景にある。

③流通

景德鎮十大陶瓷工場歴史博物館の李館長によれば、景德鎮に来る客のうち「7割が知名度を、2割が陶磁器を、1割が文化を買いにやってくる」という。市内の北東部に陶磁器販売店の集約区域である「中国陶瓷城」には、約300店舗がひしめき合って販売合戦を繰り広げ、週末には国内外から集まる大量の観光客が観光バスでやってきて、大きな壺や家庭用の陶磁器セットを買っていく。もっとも、販売している製品は所謂低品質の普及品で特定の趣味を持ったものは置いておらず、店舗に

78) 徐莉氏

79) 景德鎮市瓷局

80) 二十歩文雄氏

81) 徐莉氏

82) 和高如勇氏

による差別化も進んでいない。

業界団体としては生産中心の陶磁器協会（政府と企業、業種団体）が存在するが、流通管理の専門協会は存在せず、市場に依存している。貿易会社や輸出入会社はあるが、流通の自由度は高い。和高社長は「景德鎮は、名前は有名だが商売は下手で沿海に任せていた。花瓶などを中心に個人が「人」で売って来たが、販路が確立していないので景德鎮の洋食器メーカーはもうだめだ」と述べている。

工芸美術品に関しても、大都市への流通に中間業者は介在せず、全て個別作家との直接交渉である。顧客にはリピーターが多いが、新規のコレクターも一定の割合を占めており、香港や台湾のコレクターも購入している。2011年12月時点のヒアリングによれば、「芸術品においては国内での需要が十分にあることから、現状では海外に出てマーケットを確立している中国人は少ない」⁸³⁾ という。

④広告・宣伝

作家の知名度を高める方法としては、コンペや展示会の場を提供するといった方法もあるが、特に近年ではオークションが注目を集めている。定期的に開催されるオークションでは海外からの入札もあり、北京ではかつて年2回だった大規模なオークションが、現在では四季ごとに開催されるようになっている。作家も自分の作品を積極的に出品しており、特に若手作家にはオークションは重要な役割を果たしている。オークションを主催するのはオークション専門企業で、特に4～5社が有名である。価格を上げるために介在する集団も存在しており、相場を知らない顧客に高額で売りつけるといったビジネスも横行している。

工芸美術品の個展は、北京など大都市のデパートや景德鎮のアトリエでも開催されており、コレクターは注文を入れることができる。ここでは、顧客は完成した作品を購入するのであって、顧客が作品に対して注文を出すといった芸術的な介入はされていない。「陶磁器の知識が少ない顧客には、文化的・内容的説明から導入する必要がある、陶磁器を見るときに内包されている文化的要素を説明し、理解させていく」⁸⁴⁾ という。もっとも、文化的な価値を捉えるという視点は現在の中国に欠如している部分で、コレクションとしての価値だけを重視する傾向にあり、よいものを教えるリーダーシップ的顧客は少ない。このため、販売店がデザインのアドバイスや誘導をおこない、時には作家の潜在能力を引き出す役割も担っている。日本では工芸美術品は百貨店で個展を催すことも多いが、中国では百貨店は高級層をターゲットとしておらず、セット物の日用品ばかりが陳列されている。

83) 徐莉氏

84) 同上

5. 景德鎮の分業とネットワーク

次に、方（2004）の先行研究をもとに景德鎮の分業制度について詳述していく。景德鎮の伝統的製法では、成形した素地を匣鉢⁸⁵⁾に入れて積み上げ窯焚きする。場所により温度が異なることから、それぞれの温度に応じた釉薬をかけた磁器を置かなければならない。これらの作業は全て陶工の経験によって采配されており、製品の出来栄は陶工にかかっていた。分業が進み官窯の需要が大きくなると、人材不足から江西省の各県から労働者を雇い入れ、これらの労働者は補助的な作業に係わるようになった⁸⁶⁾。職を求めてやってきたこれらの出稼ぎ労働者は、景德鎮に愛着がなく、景德鎮に定住せず水運が途絶える季節には故郷に帰っていた。もっとも、次第に技術をあげた熟練工も誕生し、彼らは景德鎮に住み着いて定住し、家業として子孫がこれを受け継ぐようになった。このように、もともと景德鎮の窯業は地元市民（本籍人）だけでなく、外部からの労働者（外籍人）、及び国内外からの商人によって構築されたクラスターで、窯業従事者のうち外籍人は8~9割を占めていた⁸⁷⁾。

外籍人は同じ出身者同士、血縁関係により「行会」を形成し、特定の業種を独占した。外籍人は景德鎮に入ると出身の行会に入会しなければならず、ある仕事に就きたい場合には仕事を占有する行会への入会が必須だった。景德鎮では、製造する磁器により、業種により出身地が分かれていた。行会は入会者の寄付により運営され、集会所、宿泊施設を構え、商売仲介や運送手配などの業務もおこなった。有力な行会は出身地の建築様式による会館や書院を有し、それらの様式が異なる建物は景德鎮の観光名所ともなっていた。出身地域が違う従業員同士には対立も多かったという。

現在も景德鎮周辺には、図表1にみるように特定の製品を制作する小工房の地域が集積している。これらの工房群は機械に頼らない手作業による生産体制だが、方は、敢えて機械化生産をしないこの状況を、国営工場の量産体制に対して「どれも一律で個性の無い工業品に倦怠感を感じ、再び伝統と個性のある手工品を求める時代の重要に合致して、こうした手工業工房が出現してきたのではないと思われる」⁸⁸⁾と指摘する。

85) 箱のこと（こうばち、サヤ、エンゴロとも呼ばれる）

86) 上工夫、砂土夫と呼ばれた。

87) 方（2004）p.99.

88) 同上，p.94.

図表 1：景德鎮における手工工房の分布

立地	工房数	生産方式	製品種類	中心市街との距離
樊家井	約 400	手工	中・低級倣古磁器	市内
笕箕塢	約 300	手工	中・低級倣古磁器	市内
老鵝灘	約 30	手工	象嵌細工磁器、磁板	約 2km
李家坳	約 20	手工	高級倣古磁器	約 3km
里村	約 200	手工	大型倣古磁器	約 1km
鳳凰山	約 40	手工	素地、観賞用磁器	約 3km
西瓜州	約 40	半機械・半手工	日用磁器	すぐ
石岑・紅源	約 30	半機械・半手工	日用磁器	約 5～10km
官庄	約 20	半機械・半手工	日用磁器	約 10km
湖田、三宝蓬	約 20	手工	陶芸品	約 10～15km

出典：方（2004）pp.95-96

工房経営者の大半は江西省内の農村地域の農民出身で、80年代以降に景德鎮に来て窯業に携わるようになったが、90年代初頭からの経営不振で国有工場の従業員を失職し、工房を構えるようになった。さして大きな資本を必要としないこうした窯業では、シャトル窯のような全自動の焼成設備を導入するだけで大幅に労働の軽減を可能とさせ、技術やデザインのセンス、市場ニーズの理解、経験だけで経営者になることができる。最も規模の大きい樊家井には、現在では約 400 軒の工房が集積する。形態としては工房つき店舗、店舗のみ（成形した半製品を購入し、自分で絵付けをして、焼成は専門業者に依頼）、工房のみ（素地加工の専業、村内に特定顧客を持つ）の 3 種がある。生産や販売を統括・管理する組織はないが、分業・協業のシステムがうまく機能している。分業の過程には、坯土Ⅰ（成形＋下絵付又は上絵付）、坯土Ⅱ（成形のみ）、紅店（上絵商人）、窯戸（焼成業者）があり、成形は半機械、焼成は全自動化で、絵付けは手工である。絵付工房は全国の顧客に店舗販売をしているが、成形・焼成工房は集積地内の特定顧客と取引している。小規模工房同士は横のネットワークを持ち、「かつての民窯とかなり共通した特徴を有して」⁸⁹⁾ いるという。地縁と血縁のネットワークが形成され、インフォーマルな形で存在している。同じ地域の出身者は共通の言語や生活習慣を持つことから、結束が高められ、図表 2 に見られるように分業の一部を独占している。

図表 2 樊家井における出身地域と分業実態

出身地域（県・市）	景德鎮との距離	専業の製品	当該製品におけるシェア
都昌	90km	粉彩、五彩	約 30%
鄱陽	75km	人形粉彩	約 15%
樂平	30km	花鳥粉彩	約 30%
撫州	180km	元時代染付	約 10%
豊城	250km	低音釉三彩	約 50%
景德鎮市内		粉彩、五彩、染付、単色釉、素地	約 35%

方（2004）p.100

89) 方（2004），p.94.

かつての民窯では、基本的に市場に受け入れられるような製品を作る必要があった。それでも生活のため大衆のための芸術品の需要があったのは、現在のような作家のプロダクトアウト的発想の芸術品ではなく、市場ニーズを取り込んだ一般大衆の価値観や理想をわかりやすい形で具現化されていたためである。景德鎮の絵柄には①縁起物の模様や装飾（魚＝豊作、牡丹＝一族繁栄、ザクロ＝子宝）、②小説・演劇を題材としたもの（水滸伝、三国志など古代、特に明清時代のもの）、③その時代の生活や風俗、などが代表的であったが、更に新しい絵柄が模索され、抽象画のような模倣も取り入れられるようになった。日用磁器を主製品とするかつての民窯で作られた製品は、量産のコスト削減のために単純化され、廉価で売られていたので職人が銘を入れることもなかった。造形や絵付けの模様も変化することなく受け継がれていった。しかし高度な機械化生産が進む一方で、近年ではかえって個性に重きが置かれるようになってきている。鑑賞用の磁器の価格は、経費との兼ね合いではなく、デザインや絵付けによりどれだけ付加価値がつけられるかにかかっている。職人は付加価値をつけるために芸術性を追求するようになり、銘を入れたり証明書を発行したりするようになった。景德鎮に定住していない外籍人には、家業による技術の継承を越えた知識や知恵が求められることになる。

景德鎮では、市場によって価格・モノ・情報の流れが決定され、市場を通して「個人の知識や技能が一箇所に集められ、そして生産と販売の集積地が形成されていった」⁹⁰⁾ といえる。市場の情報を持ってくるのは、全国各地からやってくる商人たちである。従来のマカオや福建省莆田地域の商人に加え、本省・江西省撫州、更に瀋陽、鄭州、天津、北京、上海、広州の商人が参入し、現地の景德鎮や本省南昌の商人らも加わった。街頭では同じ出身地域者同士が集まり、工房を歩き回って仕入先を探して歩いているという。景德鎮ではこのように血縁・地縁のネットワークによる結束力をもって、分業体制が機能し、製造や商売に必要な情報が集積されてきた。

6. 景德鎮におけるイノベーション過程

景德鎮の陶磁器生産に関わる数々の技術的イノベーションは、宋時代に始まり盛衰を繰り返しながら、元・明・清の隆盛を極めた時代に皇帝御用達の官窯を中心に誕生し、これらの技術や原料が民窯にも流出していった。そこには技術に詳しい優れた陶磁管理官が存在しており、細分化された分業による陶磁生産を統括すると共に厳しい品質管理がおこなわれていた。皇帝による最高水準の需要に応えるために、最高の原料と職人を使用して完成された優れた製品は、国内のみならず貿易品として世界を市場に大量に生産されていった。特に景德鎮における磁器生産の注目すべきイノベーションとしては、宋時代の青磁や白磁の開発、元代にコバルトの輸入によって始まった高品質な染付磁器の青花、清雍正時代のヨーロッパから色ガラスを原料とした琺瑯技術による絵付けなどがある。

90) 方 (2004), p.98.

げられるが、釉薬の開発も伴って乾隆時代には「作れないものはない」と豪語するほどの技術レベルを誇るようになり、景德鎮製の最高級品はヨーロッパや中東の王侯貴族にも人気を博した。資金面でのパトロンと高度な要求をする歴代の皇帝の存在や量的市場は景德鎮のイノベーション過程に不可欠であった。

しかし栄華を極めた景德鎮の窯業は、計画経済下で大工場に編成され、細々と過去の倣古品である高級品の製造を維持していたものの、文化革命で人民に奉仕する形でしか製造が許されなくなり、更に改革開放で状況は大きく変化した。今日の景德鎮は量産の普及品と芸術品に二分化しつつ、クラスターとして内では個が主体となって製造し独自のルートで販売しているが、全体として市場を彷彿とさせるような製品開発はされていない。営々と半製品を流し、絵付けを加えて「景德鎮製」として出荷してしまうため、クラスターのブランド管理もできていない。日本の伝統産業では、産地問屋が分業の采配を管理し、製品企画をするプロデューサーの役割を果たしている場合が多いが、景德鎮には産地問屋も存在しない。このため、職人や作家はリスクを負わずに制作に専念することはできず、常にビジネスを意識していかなければならない。血縁・地縁によるネットワークだけが頼りであるが、優れた人材や資源をつなぎ合わせるような役割を果たす機能が存在しない。

我々は産業クラスターの成功事例を目にすることが多いため、クラスターを構築すると製品が高度化すると考えがちであるが、景德鎮の事例をみると、実はクラスターを構築したからといって製品が必ずしも高度化に向かうわけではないことがわかる。本稿の先行研究であるイタリア・クレモナのヴァイオリン製作クラスター研究（大木 2009）では、クラスターで製品が高度化する条件として①クラスター内のピア・レビュー、②顧客の鑑識眼、③ブランドを確立するのに十分な量的市場、④パトロンの存在が必要となることが明らかになったが、本研究では、更に技術的イノベーションを引き起こすために⑤ビジネス・プロデューサーの存在が不可欠であることを指摘したい。窯業では、登り窯を使用していた時代には費用面からも窯を共有しており、窯出しの際に他作家の作品を見る機会があったため、他の作家の技量を確認することもできた。しかし、これがガスや電気窯に代わったために、作家は個々に焼成するようになり、自然な形でおこなわれていたピア・レビューの機会も少なくなった。中国では官官接待で贈答用の需要が多かったが、贈答用では自らの趣味を極めさせるような製品を選定することもないので、ハイエンド・ユーザーの鑑識眼も発達してこなかった。産地問屋がないことも、クラスター内の製品についての目利きの不在につながっている。ブランドを確立するための量的市場はあるが、かつてのようにパトロンもいないので、作家もビジネスを優先していかなければならない。その結果、集積地としてのメリットは薄れ、クラスターには粗悪な普及品と芸術品が混在するようになり、かつての景德鎮の名声は失われてしまっている。

伝統工芸のクラスターでは、伝統と創造のバランスが難しい。陶瓷学院がクラスターを牽引すべく存在ではあるが、十大博物館の李勝利館長によれば、「陶瓷学院は創作としてはよいが、伝統の継承という点ではあまり貢献しておらず、クラスターのリーダー的位置づけではない。1950年代には教授陣にも経験豊かな人材が多かったが、現在は少なくとも景德鎮を代表することはできない」と

いう。まさに個は活躍してはいるが、クラスターとして伝統技術の上に培われるイノベーションを創出するような知の蓄積がおこなわれていない。

市場創造にも問題がある。先のクレモナ研究では、ハイエンド・ユーザーを狙わず中間層のボリュームゾーンを狙ったことが勝因の一つであることを指摘した（大木 2009）が、景德鎮ではハイエンド（倣古品、創作芸術品）とボトム層（量産日用品）をターゲットにしており、中間層である高級日用品の生産はされていない。しかし、GDPの上昇とともに国内家庭における食器の需要も変化を見せることになることは容易に予想され、これらの市場を開拓していくことが急務となると考えられる。

行政が民間企業とのコラボレーションを図りながら陶磁産地としての復興を試みる景德鎮ではあるが、現在のように短期的成果を求める行政主導では、クラスター内のイノベーション創出を期待することは難しい。なぜなら、伝統工芸におけるイノベーションは多様な資源や技術を組み合わせ、探求していく長い過程の上にはじめて可能となるものであり、クラスター内での技術や資源を熟知しつつ新市場を創造する芸術的かつビジネスセンスを持つ「人」は、こうした集積のメリットを活かした知の蓄積の上にはじめて出現するものだからである。リスクを負うビジネス・プロデューサーが登場すれば、作家も安心して制作に専念できる。その意味で、クラスターの次世代マーケットを創造していく力のあるイノベーターは、景德鎮には未だ不在のように見受けられる。

おわりに

中国では一般に製造より投資欲の方が強く、現地の人たちは工場を建てて外地の人に貸し、自らはその産業に関わらない場合が多い。景德鎮でも「租廠制」と言われる貸し工場を職工が利用するシステムが採られていった。貸工場のため新たな設備投資をしない標準的な工場で、技術イノベーションが起りにくい状況にあった。工場は個人の職人の技能に頼らざるを得ず、技能を伝承するシステムを構築することが難しかった。現在では、芸術品と日用品を製造する工房が集積するが、各人が独立独歩のため、クラスターとしての製品の高度化には向かっていない状況にある。景德鎮ではリーダーシップを取る企業や人が存在せず、個別のイノベーションだけが期待されている。知の集積として技術が伝わっていく道のりが疎かにされ、ある者は価格の高い芸術品を創作し、ある者は半製品を加工して、或いは安い完成製品を仕入れて「景德鎮製」として販売している。景德鎮ではこれらが両極端で、地道に市場を作り上げていくという蓄積が欠如している。分業体制が進んでいるが、成形は半製品を購入するのが一般的なばかりでなく、絵付けを他の地域でおこなうことさえあるという。景德鎮では技術を学びに来ている陶瓷学院の学生さえ、「安易に半製品を購入したり、デザインをコピーする傾向にあり、なかなか力がつかない」⁹¹⁾のが現状である。このような景德

91) 二十歩文雄氏

鎮に比べ、「河南省では成形も絵付けも全て重視している」⁹²⁾

これまでに我々が調査してきた日本・有田の陶磁器クラスター研究（大木 2012）では、代々そこに暮らす地元市民が、技術を向上させ、それを地域に蓄積することで人々が生き残る術を考え、大切に「有田」のブランドを守りながらクラスターを継続させようとしていた。有田では 19 世紀から共同組合が存在しており、地元市民の出資をもとに有田工業高校の前身となる職人養成学校（勉脩学舎）を設立し、有田陶器市（品評会）で技を競い合うなど、自助努力を重ねてきた。これに比べると、近代以降の景德鎮の製品には見るものがなく、日本も景德鎮よりはイギリスの陶磁器やドイツのマイセンなどを競合としてみなすようになっている。手工芸品には、そこに携わる作者の人間が映し出される。景德鎮の倣古品を制作する工場では、器用で優れた技術を持つ職人が流れ作業をおこなっているが、有田・柿右衛門の工房に見るような凜とした空気は存在せず、ipod で音楽を聴きながら分業の一部である単純作業をこなしている⁹³⁾。こうした作業からは、心に響くような作品は誕生しないだろう。このようにして制作される倣古品の一方で、学院派の作家が制作するのは市場のニーズからはかけ離れた創作芸術品である。美術工芸品には製品全体のバランスが最も重要だが、半製品を買い付け、これに流れ作業で絵付けするといったシステムが一般的であるために、分業を統括し完成品として手をかけて仕上げるといった作家が少なく、作品全体としての芸術性に欠けている。作品に心が込められていない。それでもこれまでは贈答用の高額製品が売れていたために、景德鎮の大規模な陶磁クラスターも何とか成り立っていたが、近年の官官接待禁止により芸術品の伸長も期待できない。陶磁城に繰り広げられている安物の日用品も、いずれ中国の家庭でも飽和状態になるだろう。

ビジネスの基本は市場創造であることを考えると、たとえ製品の多様性がクラスターの抱える人々の生計を支える道だとしても、現在のように作家が勝手に芸術品を制作し独自ルートで販売しているだけでは、現在の量産体制を吸収できるような市場創造にはつながらず、クラスターの存続は厳しいと考えられる。量産の食器や高級日用品について、景德鎮がクラスターとして今後どのような販路を見だし、市場を創造していくのかを明らかにしていかなければならない。そのためには、独立独歩の作家群ではなく、一大陶磁クラスターを再生させるビジネス・プロデューサーが必要となる。クラスターの新たな方向性を見出すことができれば、クラスター内で生計を立てる人々が将来路頭に迷う事なく、技術を活かした生産に従事していくことができるだろう。市場創造のためには、製品高度化に向かうクラスターの構築が不可欠である。集団から個が主体となって個性豊かに制作する時代となった今だからこそ、集団としてのクラスターによる集積の利点を活かした競争戦略を策定し、世界の一大陶磁産地として再生していく必要がある。今後の景德鎮の発展に期待したい。

92) 徐莉氏

93) 昔は 12 歳から工房に入ったが、今は高校で専門学校に行く。

なお、本研究は科学研究費基盤（B）22330115「手作り型産業クラスターの遷移位相」（京都大学日置弘一郎教授代表）の研究成果の一部である。我々の視察に多大なご尽力いただいた景德鎮陶瓷学院二十歩文雄客員教授，施弟教授，劉海峰教授をはじめ先生方，景德鎮市瓷局の皆様，景德鎮民窯博物館孫立新副館長，景德鎮十大陶磁工場歴史博物館李勝利館長，陶芸家江訓清氏，東方好友陶磁有限公司徐莉副社長（北京），工場見学にご協力いただいた景德鎮嘉加陶磁公司和高如勇社長，景德鎮光隆興業電子有限公司森田工場長，現地視察のアレンジ及び通訳としてご協力いただいた京都産業大学李為准教授，広島大学江向華助教，ガイドの宋小凡氏をはじめ，お忙しいところを取材にご協力いただいた多くの方々には，この場をお借りして深く感謝申し上げます。

参考文献

- 大木裕子（2009）『クレモナのヴァイオリン工房：北イタリアの産業クラスターにおける技術継承とイノベーション』文真堂
- 大木裕子（2011）「利川の陶磁器クラスター：クリエイティブ・シティ利川のクラスター戦略に関する考察」京都産業大学『京都マネジメント・レビュー』第18号，pp.143-155.
- 大木裕子（2012）「有田の陶磁器産業クラスター：伝統技術の継承と革新の視点から」京都産業大学『京都マネジメント・レビュー』第20号，pp.1-22.
- 金沢陽（2002）「景德鎮官窯の成立」東洋陶磁学会編『東洋陶磁史—その研究の現在』東洋陶磁学会，pp.91-98
- 高福成（2009）「中国ブランド構築の難しさ～景德鎮はなぜ衰退したのか」2009年8月2日 <http://guideread.blogspot.jp/search/label/Case%20Study>（2013.5.1 参照）
- 彭涛（2007）「景德鎮窯業史の研究」龍谷大学博士論文
- 佐久間重男（1999）『景德鎮窯業史研究』第一書房
- 島田文雄（2013）「陶磁描画だみ技法から考察した日本・中国—有田，景德鎮，醴陵の陶磁技法」科学研究費基盤研究（B）研究報告書 平成25年3月
- 四方田雅史（2006）「太平洋経済圏とアジアの経済発展——戦前期における日本・東アジア間の共時的構造と制度的差異に着目して」早稲田大学博士論文
- 田中信彦（2009）「中国ブランド構築の難しさ～景德鎮はなぜ衰退したのか」Wisdom，「深層中国～巨大市場の底流を読む 第12回」2009年8月3日 <http://www.blwisdom.com/strategy/series/china/item/1389-12.html>（2013.11. 1 参照）
- 三杉隆敏（1989）『やきもの文化史』岩波書店
- 陳舜臣（2007）『景德鎮の旅』たちばな出版
- 陳舜臣（1980）『景德鎮からの贈り物：中国工匠伝』新潮社
- 二十歩文雄（2011）「中国江西省景德鎮」地球ラジオ 2011.4.13 <http://www.nhk.or.jp/gr/mado/2011/11-1.html>（2012.12. 1 参照）
- 方李莉（2004）「中国景德鎮：新時代における民窯の再生とその実態」『文明21』No.17. pp.91-105.
- 李艶，宮崎清（2010）「景德鎮の伝統的磁器産業の中核としての手作り工房の諸相」日本デザイン学会『デザイン学研

究』56 (5), pp.37-46.

李艶, 宮崎清 (2013) 「景德鎮における製磁の雇用体制:現在にもみられる中国景德鎮地域における伝統的製磁業」『デザイン学研究』60 (1), pp.1-32.

喻仲乾 (2003) 「景德鎮の磁器産業の発達における官窯の役割:1402-1756」『国際開発研究フォーラム』24, 2003. 8, pp.273-289.

ヒアリングご協力者

景德鎮市瓷局 副調査員 雷軍氏, 副主査 叶逢春氏

景德鎮十大陶磁工場歴史博物館館長 李勝利氏

景德鎮嘉加陶磁公司, 株式会社華玉社長 和高如勇氏

景德鎮光隆興業電子有限公司 森田工場長

景德鎮陶瓷学院 施弟教授, 劉海峰教授, 劉大志教授, 二十步文雄客員教授

景德鎮民窯博物館副館長 孫立新氏

東方好友陶磁有限公司 副社長 (副總經理) 徐莉氏

江訓清氏 (作家)

宋小凡氏 (江西省海外旅行社社長)

Industrial Cluster of Porcelain in Jingdezhen by the perspective of innovation process

Yuko Oki

ABSTRACT

The history of Jingdezhen porcelain can be traced back over 1900 years to the Han Dynasty. Through consistent innovation in the creation of ever more beautiful products at the government run and private sector porcelain furnaces, Jingdezhen succeeded in becoming the world center for porcelain production. In this traditional craft cluster, a high degree of division of labor had been introduced to increase the efficiency of mass production. Following a long absence because of the Great Cultural Revolution, Jingdezhen has again started to produce artistic porcelain, in addition to the mass produced daily tableware and industrial products. A joint collaboration between government and private sectors is attempting to restore Jingdezhen as the world center of porcelain production. In this paper, the historical and present situations in Jingdezhen are analyzed from the viewpoint of the innovation process in the cluster.

